

## 精神分析のはなし 第7話

**JAM**：精神分析家は、ひとりの治療者です。それを忘れないでください。

ひとが分析に赴くのは、治るため、少なくとも、具合がよくなるようにという目的のためです。そして分析家にはやるべきことがあります。・・・分析家だけではありません、すべてのプシ [精神科医や臨床心理士など頭に **psy** がつく職業の人たち] は、削除するべきなにかとしての症状にたいし、やるべきことがあります。症状が、うまくいかないものことである限りで、そう言うことができます。また、もしひとりのプシに会いに行くなら、それはひとがあるなにかについて自分に責任があると考えているからであり、うまくいっていないことを自分自身に帰属させているからです。

そしてひとが精神分析家に会うのに、べつの目的があることもあります。例えば自分自身を知るため、という場合もあり得ます。そのような場合、この基礎に基づくなら、その要求が受け入れられるかどうかは確かではありません。訴えや、苦しみが必要です。主体は自分が嘆いていることについて、たったひとりでは解決できないと知っているので相談するわけです。

そして症状はまず、たとえば重荷だったり快適でないことによって提示されます。その場合、「大変結構です。さあ、始めましょう。あなたは何に苦しんでいるのですか」と言うプシがあります。そして「ほら、これが私が手にしている用具一式です。評価可能な一定期間、あなたのお役に立つつもりですよ」などと言います。

もしそれ、快適でないこと、が、症状の唯一の側面であるならば、それで大変よかったことでしょう。しかしそれは症状のもつ唯一の側面というわけでもないし、もっとも深い側面というわけでもありません。症状とは、最初、そのひとが自分のものとしてそれを認めることのない限りで、その人自身が孤立させ、指し示し、輪郭を描く、あるなにかのことです。そのひとがやったり考えたりする沢山のなにかにおいて、あるいはそのひとが台座となっているたくさんの現象において、その人は自分をそこに認めていないあるなにかのことです。

ということは逆に、そのひとがそこに自分を認めるある何かが存在することを意味します。その人自身のイメージ (像 **image**)、自分にたいして持つイメージが存在します。いわば、それはそのひとの自我です。そのひとの自我は、まさに本当に本質的に、ひとつのイメージ

です。自我とは、鏡のなかで生まれる何かである、と、ある種の隠喩が語ることも可能です。自我は想像的なものとして生まれ、全体的形態として、身体の形態として、生まれるものです。そしてひとが自分の人格についてもつ観念は、イメージに合わせて作られています。

それはあたかも自我がひとつの全体的形態であり、開花する可能性があり、総合的な形態であるかのようです。そしてたまたま、偶発的に、間違っただ概念の導入によって、自我が統合することが課題になっているかのようです。そこには適合しないような、かつ圧迫しているであろうある種の諸要素があるかのようです。

しかしそれは、おそらく幻想ですね。人格の開花を約束する人たちは、偽りの約束をしています。症状とは、アクシデントではありません。まず、症状とは自我の組織から逃れるものであり、自我の力の外で、独立した仕方で維持されるものです。

症状は、意識だとか人格の統合と呼ばれるこの力との関連では、こう言ってよければ、超領土性 (extraterritorialité) という性格を持っていますね。そしてあなたを自分自身の主人であることへ誘う、あらゆる心理学を横滑りさせることが可能です。今日、実際に、自己コントロールを説く教授たちが存在します。彼らの理想は、「自分が自身の主人である」、というものでしょう。

よろしい。症状とは、自我の帝国においてひとつの洞窟です。想像的なものであるこの自我との関連で、症状が抵抗するものであることは確認されています。もし自我が想像的なものであるなら、症状、本当の症状とは、現実的な (réel、現実界の) ものです。そのうえ、ある人たちにおいては、もっとも現実的なものとは、しばしば自身の症状となっています。

ですから、フロイトが確認したのは、このような内的世界の断片が存在するという事、それは自我の帝国には異質のものであること、外的世界にとって自我がそうすると想定されているように自我はそれに適応しようと導かれること、つまり自我はしばしば逆境にくじけず、症状を自分のものにする、ということです。フロイトはそれを「自我の症状への二次的適応」と呼び、さらに進んで、「自我による症状の体内化」とすら呼んでいます。

つまり最初るとき、それはあなたをひどく困らせますが、第二の時、あなたは症状を自我の球体のなかに誘い、あなたの一部とし始めるということです。現にそれはあなたが自身のな

かで最も愛する、一番愛するものとなるまで行きます。フロイトがそこで発見したこと、精神分析家の目には全面的で迅速な治癒のあらゆる約束を無効化するものとは、症状において、ある満足が存在しているということ、隠れた満足が存在するということです。

現に、あなたの自我にたいして、苦しませるかもしれない満足があり、症状は、それでもやはり未知の満足を含んでいます。そして症状は、ひとつの満足の意味をつかむ可能性があります。フロイトがまず発見したのは、症状とは、メッセージからなる夢のようなものだったということです。彼はそれを自分自身の身体とともに語る主体—自分自身の身体の部位とともに語る—と言っておきましょう—において、そして自分の思考に病む主体を研究することで発見しました。後者は考えること、係わっていることを考えることを止めることができない人たちです。

フロイトは、症状が、享樂の価値をもつことを発見したのです。たとえばあなたは、周囲に嫌われるような性格特徴を呈する人たちの例を知っているでしょう。その人たちは自身の語と症状のあいだの違いを作らず、自分にとって本質的な仕方で嫌われるような性格特徴に固執しています。それは削除されるべきなにか、ではないでしょう。そのうえ、強迫症者と言われるこのモデルについて言えば、私たちの文明を築いている偉大な官僚組織のなかには、このような人たちが沢山いるのです。

それからこの二番目の側面は、一番目の側面と大変異なるものです。症状の一番目の側面とは、「それが困らせ、重荷を負わせるところで、ひとはそれを解決したいと思う」ですが、第二の側面は、臨床にとってははるかに重要なものです。それは「もしかりにひとがそれを嘆くとしても、ひとは解決したくないものだ」という側面です。無意識に、ひとは解決を望まないのです。そして抵抗するひとつの芯が、存在します。

ですから表面の諸困難がひとたび解決すると、ひとはこの芯が症状的なものであるとみなします。この芯は、犬にすむダニのようにあなたに執着していて、寄生虫です。それはあたかも、症状が、たとえばあなたの思考の内部にある、寄生的な有機体であるかのようです。そしてあなたが苦しむあいだ、症状はあなたで享樂しているかのようです。

したがって、そこで、治癒とは、身体が問題となる（病気の）場合よりもはるかに複雑な、なにかであることとなります。症状とは、享樂のひとつのモードです。そしてフロイトが達した限界をすこし先に進めてひとは、人類においては、享樂のモード全体が症状的であると

言うことすら可能です。いずれにせよ分析経験において、ひとはほかのものには出会いません、そしてそれは一般化できるものです。話す存在は症状的な仕方でのみ享樂するし、そうあらねばならないような仕方では、けっして享樂しないのです。

そしてそこには、こころの問題の治癒全体にたいしてひとつの限界となる、本質的な変調が存在するという考えが存在しています。しかしもちろん、まさにこの状況こそが、ずっと以前から、この治癒を約束する、はったり屋を生みだしているのです。そして今日も彼らは喜んで治癒を約束しています。科学をまねた言語において、計測の言語において、彼らはそうして、しかし一般的にはご存じでしょう、それはほんとに小さな小瓶を、いかさまの万能薬を売るためなのです。それは見ず知らずのひとに、ある恒常的なウェルビーイングの状態であろう、「正常な」状態のためのプロパガンダを売っているのです。

フロイトは、症状の満足とは、代理的満足であると言っていました。しかしそれは、より少ない満足であることを意味していません。おまけに彼は、この代理、代用品 (ersatz) 一と言うのはフロイトが用いている言葉だからです—は、もとの満足と代理的満足とを区別することができない、ともちゃんと言っています。

ラカンの考えは、最終的に、あらゆる満足は代理的なものである、というものです。それらはひとが夢見る満足に置き換わるのだが、しかしたとえば、性的に完全な満足というものは存在しない、というものです。もちろん、症状は痛みを与えるかもしれませんが、快適さのなさを与えるかもしれません。苦痛を生み出したりするかもしれませんが、しかしながら、この痛みの内側に、隠された享樂が存在します。

そしてそれこそまさに、パラドックスなのです。つまり、主体は、たとえ苦しんでいても、ある水準では根本的に幸せである、ということです。それを理解することは難しいものです。そういう理由で、フロイトは、それを理解させようとして、欲動と呼ばれる神話を作りました。主体はつねにそうと知らずに幸せである、たとえ苦しみににおいてさえもそうなのだ、という考えに立ち戻らせました。そしてついに、無意識とはまさに、この享樂を望む寄生虫である、たとえあなたに、あなたの自我にとってそれは高くつくものだとしてもそうなのだ、という考えに立ち戻らせるのです。

つまり、ひとは住まわれている、ひとは自分ではどうにもならないものによって住まわれている。そしてひとの内奥の中心にすらさえも、というわけですから—そのことを、私は聖アウ

グスティヌスが表現した仕方で考えざるを得ないのですが、intimior,intimo,meo、私の内奥よりも内奥のもの、と彼は表現しました—彼は神についてそう言っています。

そしてその点にこそ、神の考えがやって来て、課されるのです。それがこの内奥において基礎を残すことが可能になるのです。その内奥とは、私にとり私のうちにあつて異質なものであつて、ラカンはある造語で呼びました—その後この語は少し広まりましたが—外密性 (extimité)、と。

それは「それは神なのか？」のなかにあります。それは寄生虫なのか？そこにはたぶん、ふたつの側面があります。そこにも、ひとつの同じ現象があります。結局のところ、分析では、それは非人間性のなかの分析の立場を定義するものです。なぜなら、もし「主体はつねに欲動の水準では幸せである」、という考えを結論とするのであれば、それは分析家の立場を、同情、哀れみ、サマリア人的な援助から分かつものになるからです。

分析家は、主体の苦しみのなかで、主体が満足している点、その点に狙いを定めるものです。お望みなら、それはおぞましいことですし、分析的な立場はおぞましいですね。したがって、だれかがあなたの家に泣きながらやってくるとします。もちろん、大きな声をあげて笑うのは推奨しません。しかし時折、大きな苦しみを前にしてちょっとした笑みを浮かべるのは、良い効果をもつものです。なぜなら、もしあなたがそれ、ちょっとした笑みをうまく浮かべられるなら、苦しむ主体はその苦しみとすこし距離をとることができるからです。

もちろんそこには細心の注意が必要とされますね。なぜならそのせいで患者候補は、そうそうに逃げ出すかもしれないからです。主体は幸せである。主体にとり、あらゆる出会いは幸せを維持するのに良いものであり、出会い、偶発事、アクシデント、それらは反復を養います。おなじ幸せの反復、苦しみのなかにある同じ幸せの反復を養うものです。

